

『花園院宸記』 瞥見

高柳祐子
たかやなぎ いうこ

(文語の苑 講演要旨)

兩統迭立の世、持明院統の天子に花園院(永仁五年「一二九七」)と貞和四年「一三四八」《南朝にては正平三年》)出でたまふ。日記『花園院宸記』を記し給へるが、内二十三年分現存し、古來史家の重寶せる歴史資料なりき。至尊の御身とは言ひ條、現身の人たる喜怒哀樂を細やかに描寫したまへる文學作品なり。本講演にては、就中二件の記事に注目し、以て『花園院宸記』の神髓に迫らんとこそは願ひたりけれ。

其一は、文保元年「一三一七」三月三十日條にして、御自らの讓位を巡る感慨を述べ給へり。萬乗の君たる自負、御素志果すをえ給はざりし無念、閑院内裏へ移徙あらせられんと執着など、大御心の機

微を記したまひて、讀み參らすほどに、七百年の

往時、京洛の有様を目の當りにするが如し。後記には、大自らの御所爲に忸怩たるものあり、自戒の爲に敢へて御恥をも抹消せじとの趣を述べたまふ。眞摯なる院の御爲人を窺ひ奉るに足る。

其二は、元亨四年「一三二四」六月二十五日條。崩御あらせられたる後宇多法皇を評し奉りしなり。英明にておはしまししは言ふに及ばぬ花園院、分けて人物批評に慧眼の譽高けれど、更に此の日の記事は史家の注目する所なり。すなはち、後宇多法皇と後醍醐天皇の御父子に確執あり、大覺寺統の内部にて人心の一統を圖るに由なければ、畢竟動亂の出来せずんばあらじと危惧したまふなり。洵に院の豫測

せられたるに違はず、果然、後醍醐天皇、主上御謀
叛の儀ありて、つひに南北朝の動亂、戦國の世の
濫觴とぞなりにける。花園院の先見の明、何爲感
嘆せられであるべけん。

興味津々たる記述なほも輩出す。つひに倒幕を果
したる正中の變、元弘の變の仔細。後醍醐天皇に殉
じたる日野資朝の盡忠。誰か能く、或は胸を躍らせ、
或は涙垂るるを禁ずるを得ん。而してまた、院の漢
文の格調高き。學識無雙の裏打ちなくてえやはかく
あるべき。

この拙なき講演、以て皆々様の『花園院宸記』を
繙きたまふの契機となりたらんには、學徒の本懐此
に過ぐるなからん。